

式辞

春の息吹と柔らかな瀬戸内の光が満ち溢れるこの広島の地に、2ヶ国、18名の留学生を含む686名の皆さんを、県立広島大学の学生、あるいは大学院生としてお迎えできましたことは、私達の大きな喜びとするところです。併せて、これまで皆さんを支えてこられましたご家族の方々に、県立広島大学を代表いたしまして心よりお祝いを申し上げます。さらに、ご多用にもかかわらず、広島県知事 湯崎英彦様、広島県議会議長 山木靖雄様をはじめ、ご来賓の皆さまにご臨席頂き、衷心より御礼を申し上げます。有り難うございます。

それでは最初に、皆さんが門をくぐられました県立広島大学の紹介からお話を始めたいと思います。本学は、県立広島女子大学、庄原市の広島県立大学、そして三原市の広島県立保健福祉大学が再編・統合し、2005年に県民や多くの方々の期待の下に新たな県立広島大学として誕生しました。したがって開学後15年目の春を皆さんと共に迎えようとしていますが、1920年に創設した、前身である県立広島高等女学校の源流を辿れば、来年は、設立100周年を迎える歴史ある大学であります。

大学を支える基礎力は、教育力と研究力にあります。現在、3大学統合による確かな向上を見ることができます。教育力について言えば、全授業に対する学生の満足度調査結果は、3大学統合初年度は80%でしたが毎年上昇を示し、教職員一体となった教育力改善の努力により、現在は92%程度にまで達しています。学生が授業に満足を感じることは、大学がしっかりした教育を行っている重要な物差しになります。

一方、研究力についてはどうでしょうか。大学の客観的な研究力指標の一つとされている文部科学省からの科学研究費助成事業の採択件数が、本学の力を証明しています。昨年度は大学統合時の約2倍、83件の採択件数に達しこの12年間、中・四国・九州27公立大学の中で際立ったトップの座に位置しています。

こうした教育力と研究力は、学生の真摯に学ぶ姿勢と相乗効果を発揮して本学の誇るべき教育成果を産み出しています。例えば本学卒業生の就職率について言えば99.8%、さらに本学で受験資格の得られる国家試験においてもトップクラスの合格率を誇り、全国レベルで競うに値する大学は、数校に限られています。実直な学びの姿勢は統合前の3大学に共通していましたが、その伝統はしっかりと今の県立広島大学の学生に引き継がれています。しかしここで強調したいことは、私達の大学は単に国家試験の合格率を誇るレベルの大学ではないということです。言い換えれば、本学の教育の最終目的は国家試験に合格するだけではないということです。国家試験の合格を目指す、それはまだ学びの

世界に限定されるからです。

もう少し掘り下げて説明します。X=Yという式があるとします。高校時代の受験を主体とした学習でしたら、XがYである理由を懸命に理解すること、そしてこの数式をひたすら覚えることに努めたと思います。これはまさに学びの世界です。大学では学問の府と呼ばれるように、学問の「学」、学びに「問」、すなわち問うことが付け加わります。それは学ぶ内容に対して自ら問う過程が学問には求められることを意味しています。孔子の論語に「学びて思わざれば 則ち罔し」という一節があります。教わるだけで自ら考えなければ、学問を本当の意味でものにすることはできないということです。X=Yに対する新たな説明方法を自ら見いだそうと考える、さらには、X=YであるならY=Zという事象を踏まえ、果たしてX=Zが真に証明できるかどうかの検証、そして場合によってはXがYであること自体を疑うことも大切です。単なる教えられた知識を乗り越え、こうした自ら考える姿勢を皆さんにしっかりと身につけることを、県立広島大学は教育の最大目標に据えています。現在本学は、文部科学省から国内9つの高等教育機関の一つとして選ばれた、全国大学のリーダ的存在として様々な取り組みを行いながら、学生一人一人が、受け身で知識を得る姿勢から脱却し、主体的に学び、自分の力で考えようとする積極性を身につける姿勢を教育しています。こうした自ら能動的に学ぶ力を育てる教育は、アクティブ・ラーニングとして称されていますが、私達は、様々な角度から教育法を工夫しています。例えば広島県教育委員会の支援のもとに高校の授業の現場に大学教員が訪れ、高校現場の実態を学びながら高校と大学を結び、自ら学ぶ志を育てる方法を大学教育に導入しています。

何故そうした教育を本学は推進しているのでしょうか。それは、皆さんを待ち受ける現在の社会は、国家や地域という境界を越え、環境破壊、飢餓、貧困、所得格差など様々な問題が複雑に絡み合っており、取り組むべき課題に明確な正解が無い社会が広がっているからです。すなわち、様々な環境要因を自ら判断し、最適解を導く判断が求められています。この場合、膨大な過去のデータを踏まえ、数値的に合理的な答えを引き出す能力は恐らく人工知能、すなわちAIの方が優れているかも知れません。しかし、解の成果を受け止める人々に寄り添った感性や、意欲そして未来を産む創造力はAIでは捉えることはできません。単なる学び、知識のみでは、これからの社会課題を切り開くことはできません。多様な課題に対応する確かな実践力、困難な課題を切り開くイノベーションを産む力が何よりも求められています。Albert Einstein の言葉を借ります。“Knowledge is limited. Imagination encircles the world.” 「知識には限界がある。想像力は世界を包み込む」。私達は次世代の社会的リーダとなる皆さんが、多様な社会に適応できる確かな実践力と想像力を主体的に身につけ

ることが今求められている、最も重要な教育課題と認識しています。そのためにも、アクティブ・ラーニングを介して、現在、広島、庄原そして三原の3つのキャンパスでは地域の力を借りながら、皆さんに向かい合い、実践力と想像力、この2つの力の基礎となる「自ら学ぶ」という志を涵養しています。ここで心に銘じてほしいことは、大学において、こうした教育を自分のものにするためには、取り組む意欲と継続する努力が前提となり、これだけは皆さん次第であるということです。

最後に、9年前に亡くなった事業家であり多くの啓発を私達に与えてくれたジム・ローンの言葉で式辞を締めくくります。

「収穫は種を植えた人だけに訪れる。祈った人ではない」

皆さんの心に、種をまくのは皆さん自身であることを自覚し、本学でしっかり学問を行ってください。私達県立広島大学教職員一同は、心から皆さんの積極的な学びと学生生活を応援することをお約束して式辞を閉じたいと思います。皆さんにとって、本日が、素晴らしい未来を拓くその一步の記念すべき日になりますように。

平成31年4月5日
県立広島大学 学長 中村健一